

アホになれんやつが ほんまのアホや

子どもの頃から、だからともなく聞かされてきたことばだ。アホになれんやつがほんまのアホ。アホは「ばか」とは（たぶん）違ってひとを蔑むことばではなく、どこか慈しみにあふれることばだ。じぶんを凹ませたり、あえて笑い物にしたりすること、その場の緊張を解く、そういう努力とか、気の利かせ方を褒めてやるという心根が、上方の、このアホということばづかいにはこもっている。

こういった心根は、わたしのような「学者」にも分け持たれていて、じつさい東京の「先生方」が学会発表の途中で聴衆から苦笑が漏れたら「失敗した」とほぞを噛むところを、関西の「学者」は発表中にいちども笑いが起こらなかったら「きょうの発表はだめやった」と落ち込んでしまう。

阪神・淡路大震災のときもそうだった。夫の圧死

についてたとえばこんなふうに語りだす被災者がいた。

「わたしが二階にいまして、一階にいた主人が、二階に妻がいます、助けてくださいと叫んだんです。そしたらな……（一呼吸おいて）二階が一階になりましたん」。

これは詩人の佐々木幹郎さんからうかがった例だが、わたしも泣き笑いといったような語りに当時、何度も接した。笑いをまじえることで悲しみがきら星のように点滅し、感情のそうした振幅によって悲しさがいつそう深まる、そのような語りは、同時に、痛々しくて聴くにしのびない話を、それでも固唾を呑んで聴こうとしているその聴き手の緊張を、さりげなくほどこしてくれもした。そういう相手への思いやりが、慰められる側ともいえるべき被災者のことばにこもっていた。

じぶんがアホに見られても、ときには悪者にすらなっても、それでまわりが和むならそれでいい……というセンスである。江戸期からぎゅうぎゅう詰めの都市生活を送ってきたひとたちが編みだした、せつなくもたくましい智慧なのだろう。



1949年、京都府生まれ。哲学者。専攻は臨床哲学・倫理学。現在、大谷大学教授。1989年、『分散する理性』および『モードの迷宮』でサントリー学芸賞受賞。主な著書に、『「聴く」ことばの力』（阪急コミュニケーションズ）、『「哲学」と「てがつく」のあいだ』（みすず書房）、『くじけそうな時の臨床哲学クリニック』（筑摩書房）、『語りきれないこと 危機と傷みの哲学』（角川学芸出版）などがある。